

終章

20 世紀転換期のアメリカに現れた〈革新主義〉の動向は、「現代アメリカ」の基礎となる国力を作り上げた。〈革新主義〉は、〈社会的福音主義〉に基礎付けられた分野横断的な科学的知見の応用によって、「19 世紀アメリカニズム」の非効率、不合理、社会発展の限界、成り行きまかせの急激な工業化・都市化、大企業の市場独占、貧困、及び劣悪な公衆衛生など社会悪に対して、20 世紀に見合う形態への移行を企図し、中産階級が主導的役割を担って進められた大規模で広範な一大社会構造改革であった。

〈革新主義〉はまた、社会科学的知見を応用し、アメリカ社会に〈庶民=平均的アメリカ人〉を誕生させた。もとより移民国家にして、法律上のアメリカ人としてしか措定しえなかったその多様性のなかに、実質的なアメリカ人の共同体を形づくる基礎となるものであった。彼ら、本論のいう、〈庶民=平均的アメリカ人〉は、〈大衆消費社会〉の中で〈消費の民主化〉による豊かさを獲得し、層の厚い中産階級を形成していった。かかる方途による豊かさの実現こそが、史学者オリビエ・ザンズの言葉を借りれば、マルクス主義に対する、アメリカの回答となったのである。このような過程の中で、およそ 20 世紀半ばまでには、〈革新主義〉を淵源とする社会構造改革により、中産階級を基軸とした豊かなアメリカが実現したのである。

一方、豊かなアメリカが現れた頃、つまり 1940 年代初頭において、のちの 20 世紀後半のアメリカのあり方を基礎付ける 2 つのヴィジョンが、ともに「ヘンリー」の名をもつ 2 人の人物から提案されることになる。すなわち、1 人は、ヘンリー・ルースの「アメリカの世紀」(The American Century)であり、もう 1 人は、ヘンリー・ウォーレスの「庶民の世紀」(The Century of the Common man)である。

『タイム』紙や『ライフ』紙の創刊者で知られるルースは、「アメリカの世紀」において、合衆国が自由と正義の理想の原動力となって 20 世紀の世界をリードすべきことを訴えたものであった。いわば、〈革新主義〉によって実現した国力にもとづき、一層の飛躍を図ろうとするものといえよう。それに対して、もう一方の「異端の副大統領」ウォーレスによる「庶民の世紀」は、すなわち、それまでの〈革新主義〉の動向を維持することが主張されたものであった。それによってもたらされた豊かで層の厚い

中産階級、つまり、本論のいう〈庶民 = 平均的アメリカ人〉による、民主主義の徹底を主張したものであった。そして、その後の歴史の事実としては、20世紀後半の戦後のアメリカは、ルースのいう「アメリカの世紀」を信奉することで、結果として冷戦がもたらされ、今日のわれわれの知る世界覇権的なアメリカが誕生することとなる。そして一方の「庶民の世紀」は、ヘンリー・ウォーレスの名とともに、20世紀の後半を通じて、しばし歴史の闇に葬り去られることとなるのであった。

このように、20世紀のアメリカは、〈革新主義〉のリベラルな動向によって世紀の半ばまでに豊かな国力を達成するのだが、20世紀半ばにおいて、その国力をもって、その後をいかに進むべきか、とする選択を経過することで、異相を呈することとなる。

アーロン・コーブランドは、20世紀前半を〈革新主義〉とともに生きた藝術家であった。ニューヨークに地歩を固めた彼は、写真家アルフレッド・スティーグリッツの画廊に出入りし、そこ集う多方面におよぶ文化人たちとの分野横断的な交流と議論から、アメリカ社会のなかでの藝術音楽のあり方を、真摯に考えた作曲家であったといえよう。彼の周囲にあった「ジャズ」がそれにそぐわぬと考えた彼が、1927年を境に1940年代まで追究したのが、「共同体の音楽」であった。これは民主主義に資する音楽藝術のあり方を追究するとともに、それを阻害する芽に気づくための美の省察をうながす立場でもあった。

また、アメリカにおける「共同体の音楽」ならば、それをつうじて、アメリカでの新たなコミュニティ形成を可能とするためにも、端的に、「アメリカらしさ」を有する音楽であらねばならなかった。彼にとって、これは重要な藝術的課題として重くみて、慎重にことをすすめていた。その慎重さを解き、それまで考察してきた「アメリカらしい」音楽語法を世に示すことを直接後押ししたのが、1935年にモスクワから発せられた〈人民戦線〉の契であった。研究者ニール・ラーナーは、この時期以降のかれの「アメリカらしい」音楽語法のことを「パストラル・イディオム」と名辞した。本来は、中世フランスを淵源とするこの音楽形式は、実質的には、伝統的なアメリカの表象とは何の関連ももっていなかった。ただし、そのヨーロッパ的重厚さと断絶した軽やかさと、詩人ホイットマンのような素朴さを持ち合わせた、基本和音形態の第3音のない完全5度音程や、完全4度の開けた響きを基軸とする音楽書法は、フロンティア学説とのアナロジーや、「自由と民主主義」というアメリカ建国理念にかかる普遍的理念の未来の実現において、アメリカ的心情を託された。すなわち、「パストラル語法」の「アメリカらしさ」とは、アメリカ人たちにとってのほぼ唯一の国民統合の契機となる「啓蒙普遍の約束」という未来において担保されたものであった。

彼は、この「パストラル語法」において、「アメリカらしさ」の表現を可能としたのである。その「アメリカらしさ」を、「共同体の音楽」に適用するための相応しい地平として、着目したひとつが、映画音楽であった。なぜなら、映画は、つねに〈庶民＝平均的アメリカ人〉とともにあり、それこそが、アメリカ人を象徴するメディアと考えられたからである。一方で、その、もっともアメリカらしいメディアであるはずの映画において、その音楽の主流にあったのがドイツ・ロマン派風のそれであった。コープランドは、〈庶民＝平均的アメリカ人〉を象徴するメディアにおいて、「アメリカらしい」音楽、すなわち「パストラル語法」を取り入れた音楽を展開することによって、アメリカにおける「共同体の音楽」の実現を企図したのであった。そして、「パストラル語法」の「アメリカらしさ」とは、本来、豊かな未来において担保されているはずであったが、その表現の成熟にともない、今度は、時代を遡ってアメリカの過去にも投射されるに到り、ついにそこに〈庶民＝平均的アメリカ人〉にとってのアメリカの神話、すなわち、ヴァン・ワイク・ブルックスのいう「役に立つ過去」が形成されることになるのである。

さて、本論の目的を適えるための、考察の結果としての命題をここで措定せねばならない。コープランドが「現代アメリカ」の形成において果たした文化的側面での役割は、〈革新主義〉の立場から導出した「アメリカらしさ」において、音楽的な「役に立つ過去」を形成したことである。ただし、彼のこの役割は、〈革新主義〉の盛衰と同調していた。すなわち、20世紀後半以降、アメリカがヘンリー・ルースの「アメリカの世紀」を信奉し始めたとき、ウォーレス自身がそうであったように、ウォーレスの政治的心情を共有するコープランドもまた、その、政治的左派の心情を有する「アメリカらしさ」は、冷戦期の現実の世界覇権的アメリカの現実とは、しばし乖離していくことになる。しかし、「パストラル語法」により「役に立つ過去」としてすでに構築した「アメリカらしさ」は、その政治的左派の含意が削ぎ落とされた形で、アメリカのメディアを通じて、すでにコープランドの領野から離れて、今日もアメリカの神話を形成しつつけているのである。